

性、結婚、家族と革命との関係について

(一)

こんどの安保斗争をもちあげた民衆の力や犠牲が、すぐそのまま革命へ向うとはおもえない。が、その発展において、おそかれ早かれ革命の未来を見るだろう事は、「今や、ユウトビヤは可能である」と、N・ベルジャエフも「裏書」している通りである。

ところで、この「裏書」には、花の革命をほめたたえるよりも、冷厳な現実の革命を体験し、また、深く考えた事のある人達の感ずる不安が含まれている。

というのは、革命というものは周知のように、社会的な政治や経済の面に限定されるものではなく、感性が関与する文化的な全分野へ、思いもよらない深い影響を与えるものであるが、一方、革命家をもって任じている人達は、革命を政治経済的な変革としか考えることが出来ず、しかも、それらの面では立派な定見を持っているにも拘らず、文化面となるとひどい無定見と保守性をさらけ出すからだ。我々は、その無数の例を見てしまっている。

例えば一九三二年ソ連で、ガボやベヴスナーのような優れた構成派の芸術家達が、美術史上かつてなかったよえな大胆不敵な芸術の変革をやっていた当時、社会主義リアリズム（その実もっとも愚かな自然主義）の名において、ソ連各大学内に巢喰っていた大学教授達（外面進歩的なつらをしているが、何処の国にもざらにいるやり切れない保守主義者ども）の援助のもとに、党のおえら方達がその感性無知をさらけ出し、いかに彼らを迫害したかは史上有名な名である。

レーニンは、この芸術家達の迫害に、自分は芸術に無知であるという理由で関与しなかった、とH・リードは書いている。が、調べてみるとそうでもなさそうである。

では、感性的な面においてアナキストは欠点がなかったか。確か一九〇六年ロンドンでエマ・ゴールドマンと恋愛や結婚について話しあった時、クロボトキンがひどい保守的な尻っぽを出して、彼女を啞然とさせた史実もある。一流の知性のもつ革命性と、その感性が持つ保守性とのアンバランスの問題は重要である。ここでは特に人間の感性が関与する性欲、結婚、及び家族の問題を少し突っ込んでみたいと思う。

かつて、「アフランシ誌」でも一寸、この問題を取り扱った。それが充分でなかったのは、この問題を革命との関連において捕えていなかったからだ。ところで、一昨年アメリカの監獄で殺されたウイルヘルム・ライヒは、この問題を真正面から追求している。我々は彼に従いながら、批判をゆるがせにせず、彼をのり越えて行きたい。

(二)

日本古代の氏族時代には、男女関係のあり方は「通い婚」―男女同居せず、男が女のもとへ通う形をとっていた。いうまでもなく、それは自由な母系制度の特長であり、その政治経済的表現は分権的な自由な連合であった。もっとも聖徳太子の時代、すでにその氏族制度は、天皇族の勢力が及んでいた近畿や尾張などで、強権的な部族制度に変わりつつあった。蘇我氏や大伴氏や尾張氏などという族長が巾をきかせていたので、それらを一つの主権に統一する事が太子などの主なるねらいであった。が、彼らの勢力の及んでいない他の諸地方には、非常に多くの氏族的な母系社会が活発に生活していた。もし彼―聖徳―が伝えられる如く小利巧な男であったならば、そして真の国家主権の統一と安定を欲したならば、まず氏族社会の分権的な自由を徹底的に破壊すること、と同時に、その感性的表現である「通い婚」を、部族的な強権的な父系制度が持つ「嫁とり婚」に変えなければならぬと考えた筈である。処が、彼はそんな事を考えた様子はない。おそらく彼は、この問題を成り行きに―即ち、歴史の必然という怪しげなる物にまかせていた事だろう。従って、結局、彼も明治、大正日本の政治屋や、ソ連の政治屋と大差のない代物であったといわねばならない。

しかし、自民党あたりの政治屋とソ連の政治屋との差異について、少し蛇足を加えておく必要がある。というのは、ソ連には、母系制度から父系制度へ、即ち氏族社会から部族社会への移り変わる契機を説明するための一応は真実めかした「経済的決定論」というヤツがあるのに、日本には何もない。(何処にその欠点があるかという問題については、ごく最近、インドのベンガル州のある宗教団体がやった婦女暴行事件が示すように、古代インド伝来のPHALICISMとの関係を論じなければならないが、これは上品ぶった近代ブルジョワジイや、共産党の紳士諸君にとってはタブーであるので、別の論文で詳述したい)

しかし、この何の学説も持たない依然として資本主義態勢を続けている日本経済の上部構造に、どのような変化が起っているかを調べ、それをソ連と比較して見る事は、マルクス経済決定論の真疑を間接的に吟味する一助となるかも知れない。

日本に「コヌカ三合あれば養子に行くな」と云うマキシムがある。又、「己は女房に働かせるほど骨なしではない」という口ぐせもある。これらの言葉は、勿論「通い婚」時代にはなかったに違いない。当時、男は家庭などに縛られる事なく、自由に山河を飛び廻り、女も母としての義務と幸福とを味わいながら、同時に自由人として、平等に楽しく自由に、この地方に羽根をのばしていた。ところが、部族社会になって、父系家族が確立して、父が一切の経済権を握り、父のお許しのもとにおいてのみ、「嫁とり婚」と云う形式をとって公認されるようになった。

従って、前述の言葉は父系家族制度をデッチ上げた、強力な族長などの口から最初に叫ばれたものに違いない。同時に、庶民階級の心の中には、自由な母系的な「通い婚」と、その経済的表現である分権主義への本能的な郷愁から、養子縁組制度が産まれ初めたのだ。故に、氏族社会と部族社会との間におこった最初の階級斗争の尾を引いて、養子縁組家族と嫁とり婚家族の間には、深い憎悪があったに違いない。

(この養子縁組は、最近の日本において、東大、早稲田、明治、その他の大学卒業生の間で盛んである。卒業生名簿を比較研究した結果、改名者の数が年々激増している処から、この改名者を養子縁組者と見た、雑誌『日本』の統計がある。又私立探偵社や料理学校の報告によれば、養子縁組候補の素行調べは算術級数的に増大しているそうである。

これらは勿論、残念ながらプチブル層の現象であるが、一方目を農村に向けると、若い男女の発らつたる、R・F・Dの諸報告や、農業法人組織や、協同組合運動の中において、日本農村婦人の自覚は目ざましいものであって、結婚、家族、或は男女関係の諸問題が、旧態を打ち破って新しい芽を出し始めている点は、極めて重要である。)

要するに、これらの現象は、プチブル社会においてすらも、精神と肉体の自由が、社会的(政治や経済)な、又、文化一般の革新や創造の真の動機であること、経済的決定論はその上にアグラをかいているのだという、我々の従来からの確信をますます強固にさせる。

我々はこの過程の中に、前述の如く強権的な父系家族制度が、徐々に自由な母系家族制度

へ、古代とは逆な反転運動を取っている傾向を見出す。この傾向は、まだ本能的な郷愁によって動いているに過ぎないが、我々の運動はこれに魂を入れなければならぬのである。

その意味においても、我々は安保斗争に努力せねばならぬ。というのは安保が問題であるだけではなく、その斗争にそそぎ込まれた反抗的な熱情こそ、必ずや前述の本能的郷愁を意識化させるに役立つからだ。

だが、この反抗的熱情が、ひとたび実を結んで、革命をデッチ上げた場合、最初に書いたような憂慮が事実となる面が充分にある。漸く意識化し始めた日本のプチブルや、農村の若い男女の郷愁への志向を、元も子も無くしてしまわないために、我々は前例としてのソ連の、その方面の実状を、つぶさに調べて見る必要にせまられるのである。

(三)

ソ連における性革命は家族の解消から始まった。ある処では早く、ある処では遅く、家族は民衆生活の全分野にわたって早急に退化した。この過程は、苦痛多く、混沌たるものであった。それは家族の機能と、その性質についての性理論の正しさを客観的に証明した。

父系家族は権威主義者の原理を基礎づけた、あらゆる社会秩序を再生産する構造的な、又、

イデオロギー的な場である。この後者を排除する事は自動的に家族制度の位置を、下から突き出すこととなる。社会革命の中における家族の退化は、経済的な、又權威的な家族的キズナを、性的必要が打ち破ったという事実を負うていた。それは、経済生活と分離したという事を表わしている。特に、性は少数の経済的利益を握ったブルジョワジイどもに奉仕し、彼らの圧迫の下にあった。

原始的な労働民主主義の母系社会においては、性的必要は経済を含めながら、全体として社会的必要の満足に奉仕していた。社会革命の率直な傾向は、生産的な仕事をする凡ての人の必要を満足さすように、再び経済を据え変える事であった。性的必要と経済の間の関係のこの逆転は、社会革命の本質的な観点の一つである。この一般的な過程の観点からのみ、家族の退化は理解されうる。

もし、それが経済的な家族的義務の負担だけの問題であり、又、かくして性的な必要の力を保ちうるものとすれば、この過程は急速に完全に、やすやすと置きかえられたであろう。問題はそうはいかなかった。何故に家族は退化するであろうか。このための理由は明らかである。答えるのに一層困難な疑問は、なぜこの過程が、革命の如何なる他の結果よりも、一層苦しみ多いものであるか、という事である。

生産物の社会的取用はそのブルジョイや大金持だけを傷つけるが、革命の荷い手である大衆を傷つけるものではない。しかし家族の崩壊となると、経済革命をやった労働者や農民や

雇人達自身を打ちのめす事となる。家族の中に固定している保守的な機能が、革命の荷い手達に抑圧のかたちをとって、最もはっきりした姿を現わすのは、この点である。妻や子供への執着、如何に貧しかろうともその家に対する固着、色情に誘引される性癖、凡てこれらのものが、自主的な労働民主主義社会を建設しようとする彼らの、主要な活動をさまたげるものとなる。

ドイツのファシスト独裁の最盛期に、この家族的固着は、革命的勢力の有力な抑圧となった。この家族的固着がヒットラーに、帝国主義的国家主義イデオロギーを築きあげるための確かな基礎を与えた。同様にソ連においても、革命的な生活―コレクチブス化に対する抑圧的因子となった。

一方において、家族の社会的基礎の崩壊と、他方において、たいていは無自覚であるが、強制的な家族制度を感情的に保存しようと欲する、古い執拗な家族の人間との間には、とてもひどい矛盾がある。コレクチブス労働によって父系的な家族制度のかたちをかえる事は、疑いもなく、革命的な文化問題の基礎となるのである。

単に「家族から離れよ」という叫びは、しばしば欺偽以上のものがある。常に、最も大きな声で叫ぶ者は、家族への最も強力な、無意識的な家族定着者である。彼らはその解決を信じてない最後の者である。家族的な結びつきをコレクチブス的な社会的結びつきへ置きかえる事を、理論的にも実践的にも、解決するのに最も困難な問題だと思っている者達である。

もし社会が、權威的な社会原理の廃止を云いながら、家族的感情を、なお存在させ続けるならば、労働民主主義社会の文化的発展と経済的發展との間に、永遠に増大する矛盾が続くであろう。すなわち生産手段の社会的所有にはじまる経済の変革は、自由な自治的な社会の基礎であるかも知れないが、「その上に打ち建てられた社会が、自由な自治的な構造を持った社会になるとは限らない。イデオロギー的な上部構造の中で行われた革命は、自治的な構造の社会に取ってかわることに失敗する」何故ならば、この革命の荷い手は、人間の精神構造をかえなからである。(傍点ライヒ)

トロツキーの「毎日の諸問題」の中に、一九一九年と一九二〇年の間の、家族の崩壊に關する沢山の材料を見出す以下のような事実が告げられている。

プロレタリアートの家族を含めて、家族は崩壊し始めた。この事實は否定され得ない。この事實は様々な方法で解釈された。ある者は不安にされた、他の者はさし控えた、又、ある者はどうすべきかが分らなかった。凡ての者は、自分達が若者達と敵対關係に入った事を承認した。非常に混沌たる過程は悲劇的な形をとるかも知れない事、そして新しいより高い家族の秩序を取る可能性を表わすものでない事を彼らは承認した。多くの者は、労働者の家族の崩壊は、プロレタリアートにブルジョア的な影響を与えると信じた。他の者達はこの考えは間違いだと思った。そして、非常に深刻な、一層、複合的な問題性を持つ事柄である事を指摘した。彼らはプロレタリアートの家族の最初の混沌たる場面を証明していたのである。

妻も夫も、一般的なこの作用によって、益々多く夢中にされた。かくして家族制度が、その成員の上にてっち上げた諸要求が、明らかにされた。若者達はコレクティブスの中で成長し始めた。かくして「家族的義務と社会的義務との間の争いが持ち上った」(傍点ライヒ)が、しかし、後者は新しく若かった。一方、家族的義務の鎖は古く、日々の生活や、精神構造の隅々にまで深く行き涉っていた。

普通の結婚の性的空虚さは、コレクティブスの中に根を下した性的關係と太刀打ち出来ない。(日本における養子縁組のような制限的關係内においても、空虚な結婚に比べて、姑に対する気がねを少しも持たない家付き娘は、より早く、オルガズムを味得すると云う数字がでている)これら凡てから、妻や子供の上におおいかかる、強力な家族的な鎖の基礎である父の経済優位の廃除、が増大し始めた。この経済的な鎖がたち切られると同時に性的抑圧は解消する。しかし、それは、なお、性的自由を意味しなかった。性的幸福のための外部的な自由は、まだ性的幸福ではない。何よりも最初に、後者は性的幸福を楽しんだり、造り出したるための精神的能力を先決条件とする。

家族の中における健康な性的欲求は、概して幼稚な病的な性的習慣に置きかえられていた。そして不十分に内に隠されているために、家への病的依存や、しいられた愛情の元となるような憎悪を押し出していた。主なる困難の一つは、婦人達の性的不能であった。即ち性の不具、そうして実際としての経済的独立のための不用意があった。つまり子供らへの自分達の

支配の中に横たわる一性の代換された一満足、さらにその家族への奴隷のような保護を廃止するための準備と能力がなかった事にあった。彼女の全生活が、性的空虚と経済的な依存関係であったために、婦人達は自分の生活の満足を、子供を育てる事に求めた。これをいくらか抑圧する事は、子供達にとっては良かったかも知れない。けれども彼女達にとって社会によってされるこの抑圧は、自分達に対する社会の闘い、又は、その権利の剝奪だと考えた。わかりきっている事だがそれは、彼女の最も重要な性生活と代替された唯一至上の満足なのであった。グラドユウの小説「新しい大地」は、婦人達が、古い家庭や家族や子供達のために、コレクティブ運動の発展と如何に闘ったかを明らかにしている。

コレクティブの生活は、父の權威の鎖を打ち破った革命的青年の発意と、上からの法令によって行われた。しかし、家族的な鎖と、特に各自の中にある無意識的な家族的依存、それへの憧れが、集団化へのあらゆるくわだての中で、一般普通の個人達を抑圧した。

だが、毎日の生活の中に現われたこれらの諸困難は、決して、人々の愚鈍と不徳から起った一偶然な、又は、混沌たる状態の表現ではない。むしろこの状態は、性的な型と社会組織の型の間の関係を、支配するために定められた国家の法令から起ったのである。

集産的な、労働民主主義的な原始社会においては、その単位は氏族であった。それはいうまでもなく、すべての母の血族関係によって構成されていた。又、その経済的単位でもあった処の、この氏族の内部では、ゆるい性的関係の紐帯以外には「結婚」というものはなかつた。

た。それは性力学的な心理変化（ローレンスは、これに神秘性を付与したのは間違ひである）と、続く経済的变化の結果として一その程度に応じて一その主長がやがて将来デッチ上げる部族的な父系家族に従属するようになった。かくて氏族は退化し、家族と氏族とは、遂に敵対関係となる。この氏族の位置の中へはいる事によって、家族は益々、多く経済的単位としての位置をとり、父系社会の幼芽を形成するに至る。そして「母系家族組織の主長は、根元的に氏族社会と調和していた」（傍点ライヒ）が、漸次、父系家族の主長となって行くにしたがつて、その主長は益々、経済的優越を獲得して部族を形成し父系社会へ発展させるのである。

だから、最初の階級分裂は、家族の主長と部族のより低位にある部長との間のことである。母系社会から、父系社会への推移の継続の中で、家族は、その経済的機能を獲得すると、それにもまして、一層、重要な機能の変化一自由な氏族各員の「性」の抑圧に至るまでの一変化をとげる。今日の東インド人の家族制度は、この最も明快な例である。この氏族からの本質的な分離によって、家族というものは階級分裂の源となったのみならず、家族それ自身は、内側からも外側からも社会的抑圧の本源となる。

「今や、発展したところの家族人は、父系的階級組織の再生産に役立っている。この再生産のメカニズムは「性肯定」から、「性否定」への変化である。その基礎は、父の経済的支配である」（傍点ライヒ）

この体質的变化の精髓的な点を概説するならば、氏族の成員達の間の関係は、自発的な共通の利益のみに基礎を置いていた。この問題は経済的なものと、性的な関心との間の斗争によって置きかえられた。仕事の自発性は強制的なものに変わり、それに対する反逆となる。自然的な性交的社会は道德的な要求に変わり、自発的な幸福な愛の関係は、夫婦間の義務に変わる。氏族の連帯は家族的なキズナや、性欲の禁圧、神経的な騷擾、及び性的倒錯に変わり、自然的で強い自己信頼的な生物学的性交行為は、弱く従属的な神への怖れとなる。自然な性交の経験は、神秘的な法悦や、宗教的経験や、履行されなくて、むずむずしている憧憬に変わる。

「各個人の弱められた自我は」、「部族」と同化する事に力を尽すようになり、後には「国民」や、部族の族長と共に「父系社会の頭領」に、そうして、「国民の帝王」と同化する事において、力を探求するに至る。それと共に、「臣下」と云う構造の誕生が発生し、人間従属の教育の根が確保されるようになる。(傍点ライヒ)

ソ連社会革命は、その創業当時、厳密にいえば一九二二年までは、以上の過程の一新された逆現象をあらわした。それは、より高い文明化された水準と、性否定から性肯定への革命へ向うために、原始労働民主主義―厳密に云えば無政府共產主義を再建する過程であった。

この過程は古い強制的な家族を、原始的な社会の氏族とある同一性を持った組織に置き換える事であった。ソ連ではそれは、学校コレクティブス、青年協同体、その他種々のコレクティブスの発生であった。古い氏族のそれと、社会主義コレクティブスとの間の相違は、前者

が血族関係に基礎づけられ、その基礎の上で経済単位となっていた事である。これに反して、社会主義コレクティブスは、共通の経済的機能の上に基礎を置いていた。この経済単位は、必然的に性的コレクティブスを、最終的には作り出す個人関係へ導く。丁度原始社会に於て、その家族が、氏族を破壊したように、経済集合体は家族を破壊する。この過程は逆転される。もし、強制的な家族制度が、イデオロギー的にも、構造的にも支えられるならば、この集合体の発展は抑圧的となる。もし集合体が、この抑圧に打ち勝つ能力を持っていなければ、それは、その集合体の各員の家族的構造によって破壊される。

ソ連コレクティブスの発展の早期の局面において起った過程は、以上の斗争によって性格づけられる。

それは一方において、性的独立へ向おうとする性肯定を、経済的コレクティブスと、他方において個人の家族的な、従属的な、性否定との間の斗争であったのである。(未完)